

図書館の徹底活用術⑧

図書館活用の経験という実践活動への眼差し —ポランニーの「暗黙知の次元」に寄せて—

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に図書館の有用な活用方策についての周辺を毎回紹介をしています。皆さんの学習活動を拡張する拠点である図書館を有効に活用する為の窓口に於けるレファレンスサービスでの「対話」について今回は、ショーン(Donald A. Schön)の「行為の中の省察」という観点を拠り所として、「経験からの学び」にその焦点を当てながら、省察的实践としての行為や対話という経験の中からの学びが専門性を深めることを強調しました。

今回は、同様のことを少し観方を変えることで更に議論を深めたいと思います。というのは、これら一連の「経験による学び」への眼差しや、「知の生成」などに関することは、特定の学問分野にのみ特化したものではなく、我々が日常生活での様々な経験を内実として自己の内面化をしていく際に同様に観られる観点だからです。

そこで今回は、マイケル・ポランニー(Michael Polanyi)の『暗黙知の次元(The tacit dimension)』を基にして、前回までのテーマであった図書館の窓口での「対話」を暗黙知という観点から言及したいと思います。このポランニーによる著書『暗黙知の次元』には普及版である文庫になる以前はサブタイトルが付されており、そこには「言語から非言語へ」となっていました。これは、人間の活動には言語の背景にあって言語化されない状態での「知」があり、その明示的に言語化されることはないが、しかし確実に社会生活に存在する「知」を「暗黙知」とする前提に立脚しています。この「暗黙知」は誰かから伝達されるような性質のものではなく、生活や学習、経験など人間が生きる過程の中で形成されていく知の体系であり、例えば、「暗黙の了解」や「暗黙の同意」などの表現で表されます。

しかし、人間の知の在り方としてアプリオリに「ゼロからはゼロしか生成しない」という事実も一方にあります。そこで重要になるのが、前回のテーマであった「行為」「省察」「対話」です。こういった実践活動という経験を通して、自己を組織化していく為の素材を獲得し、その構築と解体を日々の経

験の中で繰り返すことによって、新たな「知」を再構築することになります。丁度、メジロー(Mezirow)で云うところの「Self-Reflected Learning」のように、行為の中で新たに経験したことを自分自身へと反映していくこと、換言すると、経験した未知の事柄を既知の事柄と統合し新たな「知」を再構築することに該当します。

では、こういった「行為」の場となる活動フィールドがどのように形成されるのかというのが、次の問題として浮上してくることになります。このことは、ドロシー・レナード(Dorothy, Leonard-Barton)たちが、『「経験知」を伝える技術：ディープスマートの本質(Deep smarts: how to cultivate and transfer enduring business wisdom)』という書物の中で経験からの知識、所謂、「暗黙知」は社会集団に於ける生活経験から生成するものではあるが、これは飽く迄、個人に内面化された認識の在り方に依存するものであり、時として、専門技術や熟練の技、匠の技など専門性を担保する知の在り方であると説明しています。これを如何に伝承して個人の問題から集団の問題へと敷衍するのかという観点で言及がなされています。

このことは非常に示唆に富む観点であって、図書館での学びとは、確かに個人に内面化される知の在り方を対象としており、それを如何に支援するのかというのが図書館の役割でもありますが、図書館そのものは個人ではなく組織集団であり、学習者も社会から孤立した状態、つまりは他者とのかわりなしに学び、成長することはないという社会文化的アプローチの前提に立脚すると、明示的に言語化されることのない「暗黙知」がどのようにして他者と共有されていくのかという問題に直面することになってしまいます。

そこで今回は、図書館という学習拠点がどのように図書館を活用する専門性を帯びる知である「暗黙知」を形成し、更に学習者に伝えるのかという観点を基に議論を更に深めたいと思います。

えだもと ますひろ(講師・図書館学・教育学)